

数についての現象学的探究

深尾 紘平

北海道大学 大学院 文学院

哲学倫理学研究室

未来社会のあるべきかたち

- ◆数の客観的な成立の根拠が明らかである。
- ◆数がいかにしてわれわれの経験で成立しているかが明らかである。
- ◆数の成立の根拠が明らかであることで、数を用いたコミュニケーションの基盤が、だれもが検証可能なかたちで与えられている。

1. 研究方法

現象学という切り口から、数についての探究を行う。

現象学：経験という観点から、世界を明らかにすることを試みる手法（数の経験等）

一方、数についての研究は、通常は数学において行われる。他方、われわれは数について、高度な研究を行わずとも、何らかのことを知っている。

例1：数の厳密な定義を知らずとも、いとも簡単に、スーパーで買う果物の数をその場で考えられる。

例2：多くの子供たちが、発達の早い段階から、おもちゃの数や友達の数について考えられる。

以上のような、日常において頻繁に現れる数を現象学的に明らかにすることを、最終的な目標としている。

2. 研究の重要性

数で示すことが重要であるとされる場面は多くある。

例1：ビジネスに際して、資料を作成するとき、数値で示すことで「客観的」なデータを提示することが求められる。

例2：徒競走で順位を決める際、数での的確に示すことが多い。「早めにゴールした」では十分ではない場合がある。

このような場面に際して数を用いるとき、数がいかにして客観的に成立しうるか、その際の条件は何であるか等についての探究が、現象学的手法に基づいて明らかにされうる。